

## 学位請求論文の内容の要旨

論文提出者氏名	機能再建・再生科学領域 顎口腔機能再建学教育研究分野 氏名 福田 はるか
(論文題目)  一般地域住民における口臭の原因と精神心理的影響に関する研究	
(内容の要旨：) <b>【背景・目的】</b> 口臭症の中には実際に口臭がある真性口臭症の他に、実際には口臭がないが口臭に対し不安を感じる仮性口臭症や口臭恐怖症といった心理的口臭があり、これらは器質的な原因がある場合と違い治療にしばしば難渋する。先行研究によると口臭恐怖症は精神心理的な加療が必要であり、このような症例では精神的な苦痛を感じ、社会生活に影響をおよぼす場合もありうる。従来のお臭に関する研究では対象数が少なく、その多くが口臭を主訴に受診した患者や少人数のボランティアを対象としている研究がほとんどである。口臭を主訴としない一般地域住民においても口臭は精神心理的影響を及ぼしているのではないかと仮定して本研究を立案した。本研究では一般地域住民を対象とし、口臭と嗜好品・口腔内環境との関連を明らかとし、さらに口臭と精神心理的影響の関係を調査することを目的とした。 <b>【対象および方法】</b> 平成 30 年度岩木健康増進プロジェクト・プロジェクト健診に参加した 1055 名のうち、無歯顎者と欠損値がある者を除いた 944 名を対象とした。口臭の判定は原因物質である揮発性硫黄化合物(VSC)濃度を口臭測定器ブレストロンII (ヨシダ、東京)を用いて測定した。本研究では VSC 濃度が 250ppb 以下を正常、251ppb 以上を口臭あり群として解析をおこなった。調査は質問紙調査により年齢・性別、アルコール摂取量 (g/日)、喫煙習慣、1 日の歯磨き回数、口臭の自覚の有無を、口腔内診査により歯周炎の有無、う蝕歯数評価した。精神心理的要因に関する調査としては口腔関連 QOL を Oral Health Impact Profile (OHIP-14)、抑うつ傾向を Center of epidemiologic studies depression (CES-D) scale を用いて評価した。統計学的解析は SPSS Statistics 26 を用いて統計学的に検討し、 $P<0.05$ で統計学的に有意差ありと判断した。 <b>【結果】</b> 対象者の男女間に有意差を認めた全身的特徴はアルコール摂取量と喫煙歴であり男性が有意に多かった。口腔内環境の特徴としては口臭を気にしている割合が女性の方が有意に高く、う蝕歯数と歯周病に罹患している人数は男性の方が有意に多かった。また、1 日のブラッシング回数は女性の方が有意に多かった。 口臭と全身的特徴の間には有意に相関する項目はなかった。口臭と口腔内環境の関係においては男性では口臭と歯周病罹患率が有意に相関していたが、女性では口腔内環境と口臭が有意に相関する項目はなかった。口臭の原因検索のため VSC 濃度を従属変数、年齢、う蝕歯数、歯周病の有無、ブラッシング回数を独立変数として重回帰分析を行った。男性では口臭と歯周病に有意な関連が認められた ( $p=0.041$ ) が、女性では有意に相関する項目は認めなかった。 口臭と精神心理的影響を検討した結果、実際の口臭と口臭の自覚の有無、OHIP-14、CES-Dの間には有意な相関はなかった。しかし実際の口臭の有無とは関係なく男女とも	

に、口臭を自覚している群が OHIP 14 (男性  $p=0.003$ 、女性  $p<0.001$ ) と CES-D (男性  $p=0.005$ 、女性  $p=0.007$ ) の得点が有意に高かった。対象者を実際には口臭を認めない群に限定しても同様に男女ともに口臭を自覚している場合には有意に OHIP 14 (男性  $p=0.005$ 、女性  $p<0.001$ ) と CES-D(男女とも  $p=0.003$ )の得点が高く精神心理的影響を受けていた。

#### 【考察】

男性では口臭と歯周病が有意に関連しており従来の報告と一致した。しかし女性で有意差は得られず、その理由として男性の方が、歯周病罹患率が高いことが一因であると思われる。さらに女性は口臭の自覚率も高く、口腔に関する意識が男性よりも高い結果、ブラッシング回数が男性より多く、う蝕本数も少ないことにより、口腔衛生状態が良好に保たれているためと考えられる。

一般地域住民において口臭の自覚と実際の口臭は合致しておらず、先行研究と一致した結果であった。口臭を自覚しにくい理由として嗅覚が順応を起こしやすい感覚であることが挙げられる。また口臭があることを他人が指摘しにくいため、さらに口臭を自覚しにくい傾向にあると思われた。言い換えれば口臭があっても口臭を自覚せず、精神心理的にも影響を及ぼしていないものと考えられる。逆に口臭がなくても口臭を自覚している心理的口臭症の被検者が多かった。実際の口臭とは関係なく口臭を気にしていることが、正常範囲内ではあるものの口腔関連 QOL を悪化させ、うつ傾向を増悪させていることが地域住民を対象とした大規模研究において明らかとなった。本研究の対象者は口臭を主訴としていない集団であり、実際の一般社会と一致しているものと考えられる。口臭は精神心理的に悪影響を及ぼすものであることから、口臭への対応に関して潜在的な需要は大きいものと考えられた。